

動いて交替の来る八時間後をどれだけ待ったことか。

続いて三〇四収容所の方だと思いが線路の枕木作りもかなりきつかった。ロシアの線路は幅広く枕木も長いはず、何十キログラムの重い物だったかも知れない。作業終了の時は抜けそうな腕と腰の痛みを味わったものだ。

私は大工作業隊だったので駅の建築となった。細かいことは忘れたが約一年かかって二階建ての物だった。

エボロン駅という大きな駅で多くの仲間と働いた。また夜間は交替で不寝番もした。この時は労働ではないので昼間作業した者が夕方収容所へ帰ると一人になり、暮色迫った黄昏の空を見て、フト、いつ日本に帰れるのか感傷におぼれたこともあった。そして

昔の夢のなつかしく 尋ね来たりし信濃路の
山よ小川よまた森よ 姿昔のままなれど……
と、いつしか口ずさんでいた。

シベリア抑留の思い出

新潟県 小 林 福 次

昭和二十（一九四五）年一月新発田に召集された。二十年終戦の時はトモンで迎えてソ連軍に抑留された。

三〇一収容所に収容された二十一年ころは食べる物もなく、ビタミン不足等で皆さん歩くことすらままならず、草原を歩く自分の足を取られ転倒するありさまでした。これではと皆で考え松の木の葉を叩いて青汁を造り、皆で飲み頑張りあったことが思い出されました。二十一年ころ、隣の収容所は三〇四で千人くらいの内、病氣その他で百人くらいの戦友が亡くなられ、亡くなられたら毎日遺体を埋める穴掘りとの情報で、戦友としてご冥福をお祈りします。

自分たちの部屋が寒いので薪割り等での毎日

した。収容所内では特にシラミが多く、いることすら分からないくらい多くおりましたことも思い出します。

五月ころ、体の検査級の種別（一、二、三級、オカ）の四種類に分けられ、オカの人たちは別の収容所へと、自分たちは二級で、きついノルマで働かされた。作業に出るとき点呼の時、マイナス四〇度での外で、点呼の時間が一時間もかかり、つらかったことが思い出されま

す。夜のシベリアの空の美しいことが思い出されま

す。雪も少ないある日、カプラノーという少尉のロシア人がトナカイを追いかけて射殺し十人分くらいの肉をもらい、焼肉で食ったときのうまさは忘れられません。また春になると白樺の芽がふくらむころ、木に切り込みを入れ汁を飲んだこともあり

ました。

昭和二十一年七月八月ころだと思えます。奥地の三〇八収容所へ四十〜五十人くらい異動になり、軍服を着た将校ばかりで、自分たちはコビキ

小隊として木材で宿舍の窓枠を造る作業でした。仕事が大変能率が良いので、黒パン三五〇グラムとスープ等々が多く食べられ、ハラシヨールポータなみの扱いを受け体力もつき、皆良かったと喜びあいました。

昭和二十二年六月ころ、自分たちハラシヨールポータで日本にダモイできることに決定しました。

昭和二十二年七月、ナホトカ港より祖国舞鶴港に高砂丸で無事上陸帰国しました。九月には懐かしい故郷（無事帰国しました）。シベリアの皆様大変お世話になりました。